

# 一九四五年の少女

——私の「昭和」

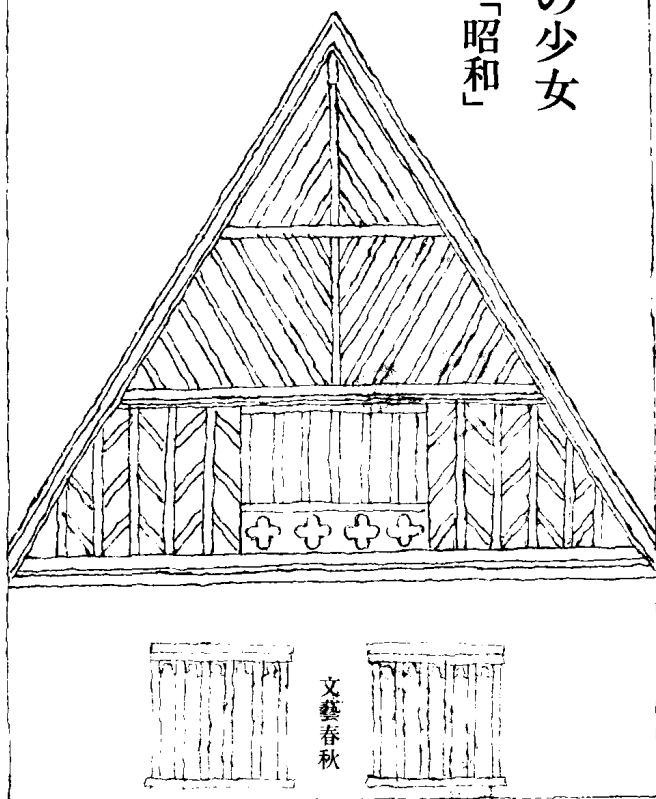
澤地久枝



一九四五年の少女

私の「昭和」

澤地久枝



# 著者略歴

昭和五年東京生れ。早稲田大学文学部卒業。主な著書に『妻たちの二・二六事件』『密約』『烙印の女たち』『あなたに似たひと』『火はわが胸中にあり』(第5回日本ノンフィクション賞)『愛が裁かれるとき』『昭和史のおんな』正統(第41回文藝春秋読者賞)『ぬくもりのある旅』『もうひとつの満洲』『別れの余韻』『滄海よ眠れ』『記録ミッドウェー海戦』(菊池寛賞)『私のシベリア物語』『雪はよこれていた』『遊色』などがある。

## 一九四五年の少女——私の「昭和」

一九八九年十一月二十五日第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者 澤地久枝

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三  
電話 東京〇三―二六五―二二二

郵便番号 一〇二

印刷所 大日本印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替え致します

## 目次

# I

アメリカ・いくさの「傷」にふれる旅

9

ビクトル・ハラの子

43

# II

暮しの消えた日

63

# III

村八分事件を知っていますか

111

かがり火の妹たち

137

大岡昇平先生との別れ 149

タブーのある社会に生きる不幸

163

逃れがたい旅 177

結<sup>ゆい</sup>の娘たち 185

焼跡から「悲しい酒」へ 211

権力による抹殺 223

## IV

一九四五年の少女 251

あとがき 303

装幀  
安野  
光雅

一九四五年の少女——私の「昭和」







アメリカ・いくさの「傷」にふれる旅



一九八三年九月二十八日正午、ジャスト・オン・タイムという感じで、ジャンボ機はゆるやかに滑走をはじめた。窓外は雨。成田空港発ニューヨーク直行のJAL007便。

乗りこんですぐに着てきたスーツは着がえ、薄いセーターとカーディガン、パンツ姿になり、コートとスーツはスチュアーデスにあずけてある。靴もぬぎ、用意されたスリッパにはきかえた。もう仕事も約束も追いかけてはこない。二十六日間の旅がはじまる。

機内もちこみのバッグには、かならずのまねばならぬ一カ月分の薬が入っているが、急場にすぐ間に合うような薬はない。無事にここへ舞いもどれるかどうか、誰も約束してはくれないけれど、行きたいから私は行く。出かけていつて会うべき人々がいるのに、じっと東京で暮してはいられない。これが私の本当の「病氣」なのかも知れないと思う。

旅の時間をつくり出すための、ひどく忙しかった日々も、飛行機の尾翼を過ぎる風といっしょに飛び去ってゆく。ああ、また旅へ出る——ちよつと比べようのない陶醉する感情が全身を駆けめぐりたいだ。不安はない。なにが起きても私は後悔しないだろうし、こうして旅へ出かける以上の喜びがほかにあるうとも思っていない。

「ニューヨークまで、飛行時間は十二時間の予定です」と機内アナウンスがある。アラスカ経由のときには、一時間ばかり待ちあわせ時間があり、空港ビル内にうどん屋まであるのを眺め、なんとも中途半端な時間をもてあました。従来のフライトは、朝発<sup>あさ</sup>って同じ日付の朝にニューヨークへ着くので、機内で眠ることは「旅の成否」にかかわる。機内の食事は仕方ないとして、アンカレッジで眠りを中断されるのは負担になった。今回はそれがない。

一九四二年六月五日(現地時間では四日)、ハワイ北西方ミッドウェー島海域での海戦は、太平洋の戦局を逆転させた。緒戦から六カ月で、日本は空母四隻喪失、ベテラン搭乗員多数戦死という回復不能に近い打撃をこうむった。この前の戦争のターニング・ポイントがミッドウェー海戦である。だが、きわめてよく知られたこの海戦の、日米双方の戦死者は確認されていなかった。戦死者数が概数で語られてきたことへの不満からはじまった『滄海よ眠れ』の取材のために、私は三度目の渡米をしようとしている。

日本側は三〇六〇名、アメリカは三五四名。三年間かけて調べてきて、戦死者の姓名、階級、出身地、死亡年齢、遺族代表、所属艦名まで確認して私の手にあるのがこの数字である。

日本はあの海戦で敗けただけでなく、無条件降伏の事態に直面し、帝国陸海軍は解体した。過ぎしいくさの戦死者確認の仕事は、忘れられ見過された歴史の落丁の復元に似ている。

しかし、勝ったアメリカの場合も、去る者日々に疎らしい。最新の資料とされる歴史家ゴードン・ブランゲの“Miracle at Midway”につきもの数字がのっている。

戦死者

アメリカ 三〇七

日本 二五〇〇

今度の旅の目的は、十一遺族に会うことだが、うち三遺族はまだどこにいるのかわからない。黒人の戦死者中、手がかりのありそうな二人と、アメリカの公式記録に捕虜となって日本の駆逐艦上で殺害とある戦死者中、所在不明の一遺族を探し出したい。同時に海軍省へいって、今日ま

で発表されたどの資料にもある「三〇七」と、わが家の三百五十四枚のカードの差をつきつめた。  
い。

三度目のアメリカ取材旅行である。一取材に二日と考えると、旅程を組んだ。まだ会いたい家族はたくさんあるが、広いアメリカの各地に、ばらまいたように点在していて、とても一カ月や二カ月の旅ではまわりきれはしない。いまでも会っておきたい家族を約百人のファイルから選び、さらにアメリカ地図の上へ所在地を書きこんでみて、最後に十一家族を選びだした。

あの海戦の日、私が十一歳の子供であったとしても、訪ねてゆく遺族のなかには、肉親の戦死以来、はじめて日本人に会うという人がある。私は敵側<sup>エネミーサイド</sup>にいた人間としてその家庭のドアを叩かざるを得ない。

海戦時のブリズナー・オブ・ウォー（POW・捕虜）の存在、そして彼らが一人として生還していない事実は、ミッドウェー海戦の語られざる部分であった。その遺族の前に立って、どんな言葉のつづてを浴びせかけられるのか、旅の前途はおしはかりようもない。

眠っておこうと思うが、かえって眠られず、『トム・ソーヤーの冒険』を読む。なぜこの一冊の文庫をもってきたのか、自分でもわかっていない。マーク・トゥエインはコネチカット州のハートフォードで「あとがき」を書いている。なんとなく南部の町に縁のある話と思っていたので、すこしちがった。子供のころから乱読をつづけてきた私は、この本を指の間から落したまま、ずっと気になっていたのだ。

九月二十八日午前十一時、ニューヨーク・ケネディ国際空港着、入国。快晴。トレンチ・コートが邪魔になるくらいの気温。

国内線のビルまで車でゆき、四十六人乗りプロペラ機でワシントンへ。まだほとんど黄葉ははじまっていない。窓ごしの太陽光線はかなりきつい。

ワシントンは国際会議開催中で、前に二回泊ったホテル・ワシントンは満員。ザ・シェラトン・カールトンが予約されていた。ロビーには金モールのロープをゆるくはったアンティークの家具がいくつもおかれている。座るためではなく、ホテルの伝統を誇りつつ、インテリアの効果を十分に考えた配置。出来もよく、手入れもよい古い家具のよさに魅せられる。

一泊一二〇ドルあまり(税込み)といういい値段なのに、私の部屋はシャワーしかなかった。風邪をひくわけにはゆかないし、値段と不相応もあるので、フロントと交渉して変えてもらう。

英語はまるで駄目、ハンドバッグ以外には荷物をもてない私の旅には、通訳兼介助者の同行がなくてはならず、前年春にひきつづき、『サンデー毎日』編集部のSさんがずっと同行している。ごく簡単な会話はどうにかなるが、こみいった話はすべて彼女を通してのことになる。

すぐ夕刻になった。アメリカ側の調査担当者(五人目だろうか)のJ夫人と打合せる。わが子のほかに養子もかかえて仕事をしているこのアメリカ女性には、真紅のシルクのドレスであらわれた。夕食の席で、料理の運ばれるわずかな時間に睡魔におそわれる。不作法は十分わかっているが、落ちてくる臉をどうやってもあげられない。

九月二十八日は長い一日になった。食事を終えてホテルへ帰ったのは夜の九時半。それから今